

新しい天と新しい地 (3)

—なぜ神は「12」にこだわるのか—

【聖書箇所】ヨハネの黙示録 21 章 10 節～22 章 4 節

ベレーシート

●前回、同じ聖書箇所から、「天から下ってくる新しいエルサレム」という概要について学びました。木曜日の「突っ込み聖書研究」ではヨハネの黙示録 7 章を学びました。そこは、第六の封印と第七の封印の間に挿入されている間奏曲的な部分ともいべき箇所ですが、「額に神の印を押された神のしもべたち」のことが記されています。イスラエルの各部族から 1 万 2 千人ずつ、それが 12 の部族で合わせると 14 万 4 千人です。これらの人々はやがて新しい天から新しい地に降りてくる「聖なる都エルサレム」の構成メンバーです。

●なぜ、12 部族なのか(しかしこの 7 章にはダン部族が入っていませんし、またなぜ入っていないのか説明もされていませんが・・)。なぜ、1 万 2 千人なのか。1 万 2 千人は「12」の千倍です。その数にいったいどんな意味があるのか。「12」は「**神の永遠の完全数**」だという表現があります。しかしその表現では、なぜその数字が永遠に完全なのかを説明していません。

●その謎を解く前に、「12」にかかわる箇所を聖書からもう少し拾ってみたいと思います。

旧約聖書では

- (1) ヤコブの 12 人の息子たちと、そこから生じるイスラエルの 12 の部族。
- (2) 約束の地の偵察のためにそれぞれの部族から派遣された計 12 人の者たち。
- (3) 荒野の旅の途上のエリムという町で見出された 12 の泉。
- (4) 約束の地に渡って行った最初の宿営の地ギルガルに記念の石として据え置かれた 12 の石。
- (5) 大祭司が着る服の胸に着けるエポデに埋め込まれた 12 の部族を表わす宝石。
- (6) ダビデが 12 の二倍である 24 の組に分けた神殿で仕える祭司の組織。

●**新約聖書**でも、この「12」という数は受け継がれます。

- (1) イエシュアが選んだ 12 人の使徒(弟子)。
- (2) イエシュアが 12 歳の時の出来事—巡礼先のエルサレムで両親とはぐれたことで、わたしは必ず自分の父の家にいるという真理を両親にはじめて明かされた出来事。
- (3) 黙示録では、神の御座の回りに 12 を二倍した数の長老たち。額に神の印を押されたイスラエルの 12 部族から各 1 万 2 千人(合計 14 万 4 千人)、「聖なる都」(新しいエルサレム)にある「12 の部族の名前」のみならず、「12 の門」「12 人の御使い」「12 の土台石」「12 の真珠」「12 使徒の名前」、

そして「12 種の実」、さらには、1 万 2 千スタディオン、12 の 12 倍の 144 ペーキュス。

●なぜ、これほどまでに、神は「12」にこだわっているのでしょうか。人や部族や物などの「数」、あるいは「長さ」といった単位は異なっても(120 歳という年齢もありました)、12 というのは同じです。とても不思議に感じないでしょうか。感じなければそれでおしまいなのですが、こだわって突っ込んでみると、意外なことに、この数は、12 という数量ではなく、「1」という数と「2」という数の配列に秘密があるように思います。これはあくまでも私の仮説なのですが、ヘブル的視点からの真理の光を求めている者のひとりとして、意外にじっくりくるものがあるのです。今回はその秘密と、もうひとつ、黙示録 21 章 24, 26 節、22 章 2 節にある「諸国の民」とはいつたいだれのことか、そのことについても触れてみたいと思います。

1. 「父」を意味するヘブル語の「アーヴ」(אב)に隠された秘密

●ルカの福音書 2 章 41 節以降にこうあります。

「さて、イエスの両親は、過越の祭りには毎年エルサレムに行った。イエスが 12 歳になられたときも、両親は祭りの慣習に従って都へ上り」(2:41~42)

●ここでイエシュアが「12 歳になられたときも」とあります。なぜ 12 歳なのか。普通はそこに特別な意味を感じません。しかし、神の御子イエシュアを取り巻く風景のありとあらゆることが、神のご計画と密接につながっているのです。そこに目が開かれるとき、イエシュアにある神の驚くべき救いのドラマが見えてきます。

●イエシュアが 12 歳になった時に、巡礼先のエルサレムで両親とはぐれたことで、「わたしが必ず自分の父の家にいるということを、ご存じなかったのですか」とはじめてイエシュアは両親に語っています。この真理が両親にはじめて明かされたのですが、両親はそのことばの意味が分からなかったと書かれています。

●「12」という数字と「父の家」とには密接な関係があるように思われます。なぜなら、聖書の記述にはたまたまという偶然性はないと信じるからです。自然界の生態系には一切の無駄がないように、神のご計画においても、同様にすべてが無駄のない密接なかかわりをもっていると信じます。それを私たちはイエシュアの両親と同様に、なかなか理解できないだけのことです。

(1) 「父」は「子」を必要とする

●イエシュアは、なぜ神を「父」と表現したのでしょうか。母ではなく、なぜ父なのでしょう。なぜ、イエシュアは必ず自分の父の家にいると言ったのでしょうか。ここでは「神殿」を「父の家」と言っています。



●ちなみに、福音書でイエシュアが神のことを「わたしの父」という表現で語っているその数は36回あります。マタイでは12回、ルカは3回、ヨハネでは21回です(マルコにはこの表現がありません)。「天におられる父」という表現もあります。この場合、「天」と「父」ということばに対応していることばは、「地」と「子」です。「地」と「子」を意味する語彙がなくとも、「天」と「父」という語彙の中に、「地」と「子」が包含されています。なぜなら、「地」のない「天」はなく、「子」のない「父」はあり得ないからです。しかもこの「父」と「子」はひとつであることをイエシュアは宣言されたのです(ヨハネ 10:30)。

●なぜ、イエシュアは「神」を「父」と呼んだのか。そこには深い理由があります。その呼びかけの秘密は、実は、ヘブル語の言葉の文字の中に隠されています。ヘブル語の「父」(アーヴ、אָב)は、「アーレフ」(א)と「ベート」(ב)の二つの文字が組み合わさってできています。「アーレフ・ベート」はヘブル語アルファベットの最初と次に来る文字であると同時に、「1」と「2」の数を表わします。「アーレフ」という文字は本来「牛」の意味で、それは「力」を表わします。あるいは、「すべての事柄の本源」とも言えます。「アーレフ」は目には見えない本源的実体です。何らかの媒体がなければその存在を見ることのできない力ある実体であり、そのことが「ベート」の文字を必要としています。「ベート」の文字は「家」(בֵּית)の頭文字を表わしますが、同時に、この文字は「子」を意味する「ベーン」(בֶּן)、あるいは「息子」を意味する「バル」(בַּר)の頭文字です。「長子」も、ヘブル語では「ベホール」(בְּכוֹר)です。つまり、本源である父「アーヴ」(אָב)は、「子」「息子」「長子」によって、また「家」において、はじめてその実体を現わされる方であると言えます。

●さらに興味深いことには、「ベート」の文字(ב)が前置詞(בְּ)で用いられると、「(はじめ)に」、「～によって」、「～と共に」というように、時やかかわりの方法や共働者を意味します。そしてそこにはゆるぎない「信頼」が存在しています。そしてこの「信頼」を意味する動詞が「バータハ」(בָּטַח)で、名詞は「ベタハ」(בְּטָח)です。なんとすべてが、ベートの文字(ב)で始まっています。

●使徒ヨハネは、御子イエシュアのことを「ことば」(「ロゴス」λόγος)という概念で表わしました。そして「ことばは神と共にあった」と記しています(ヨハネ 1:1)。ここの「共に」という表現にはギリシア語の前置詞「プロス」(προς)が使われており、それは「互いに向かい合っている信頼の関係」を表わしています。そして、ヨハネ 1章 18節では、「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされた」とも表現しています。だれも見たことのない神(父)の秘密を知っておられる御子が、人となって来られて(「ポー」אָוּ)、「私たちの間(中)に住まわれ(「ベーン」בֶּן)、御父のみこころを語り、そしてご計画を成し遂げられました。そのことを正しく知ることが聖書の教える「悟り」(「ビーナー」בִּינָה)です。

※ここまでに使われているヘブル語の頭文字がすべて(ב)であることに注目する必要があります。

(2) 家を建てる「御父」と「御子」

בְּרֵאשִׁית בְּרָא אֱלֹהִים

●旧約聖書の創世記の冒頭は上記にあるように、「ベレーシート・バーラー・エローヒーム」です。旧約聖書には「アルファベット詩篇」というすぐれた語法があるにもかかわらず、なぜ、聖書は「アーレフ」ではなく、「ベート」の文字から始まっているのでしょうか。それは決して偶然ではなく、奥義なのです。天と地の創造は、「アーレフ」(א)によって信任された「ベーン」(בן)、すなわち、御子によってなされたからです。御子が天にある父の「家」(בֵּית)を地にまで広げられ、天地という「家」を創造されたのです。なぜなら、その家に私たちを招くためです。共に住むためです。天の父は御子にすべての権限を託して、天と地の創造をまかせました。ちなみに、「創造する」と訳された「バーラー」(בָּרָא)は、神にしか使われない動詞です。このことばも(ב)で始まる単語です。

●コロサイ書 1章 16～18節【新改訳改訂第3版】

16 万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。

●興味深いことに、ヘブル語の「創造する」という動詞の「バーラー」(בָּרָא)が、息子である「バル」(בַּר)によってなされたことを示しています。このように「御父」と「御子」とは互いを必要とし、永遠に信頼し合って存在しているのです。御父は、御子によって世界を造りました。天と地における「万物」「見えるものも見えないもの」「天と地にあるすべて」、それらは御子によって存在している「ひとつの家」なのです。その家の中に、神のみこころ、創造、墮罪、救い、福音、御国、統治、王座、栄光、シャーロームといった事柄のすべてがあるのです。回復のみわざも、創造のわざをゆだねられた御子によってなされます。

●「ベート」が意味する「家」という概念には、地上にある「神の家」「神の子孫」「主の幕屋」「主の宮」「神殿」「主にある私たちの体」「主の民」「イスラエル」のすべてが含まれ、それらは天にある「家」の写しと言えます。その「家」に住むことが救いであり、救われて神の子となった者はみな神の家における特権と祝福を味わうことが出来るのです。これらすべては、父が「アーヴ」(אָב)であることに秘められているのです。

●さて、話を「12」という数字に戻したいと思います。これまで説明してきたのは、「12」という数が、数量としての数ではなく、「アーレフ」と「ベート」の数の組み合わせであるということを理解してもらうためです。「父」を意味する「アーヴ」(אָב)が、「アーレフ」と「ベート」の組み合わせからなっているように、「12」という数字も「1」(א)と「2」(ב)の組み合わせだと考えるならば、なぜ、神が「12」という数にこだわるのかが理解できるように思うのです。つまり、「12」という数字は、聖書においては「神の所有の民」を表わす象徴的な数であり、御父と御子(神と小羊)との永遠のかかわりの中にあるいのちの保障を表わす数字とも考えられるの

です。もっとも、これは私のヘブル的視点からの独断的解釈です。

2. 新しい地に住む「諸国の民」とは

●聖なる都、新しいエルサレムは、どこもかしこも「12」で満ちた町です。門も、そこにいる御使いも、その門に記されている部族の名前も、土台石も、城壁の厚さも、門にある真珠も、そして都に流れるいのちの川の両岸にあるいのちの木が実らせる実も、すべてが「12」なのです。新しいエルサレムは、御父と御子が造られた家です(黙示録では御父と御子という言い方ではなくて、御座におられる方と小羊という言い方をします)が、その家に招かれ、そこに住む者とされた人々は幸いです。



●この「都」には、「これを照らす太陽も月もない」とあります。というのは、かつての幕屋や神殿の至聖所がそうであったように、聖なる都、新しいエルサレムでは、神の栄光の光が都を照らすからです。小羊が都のあかりだからです(21:23)。

●ところで、新しい地においては、都の中に住む者と、都に礼拝しに来る都の外に住む人々がいるようです。皆が皆、新しいエルサレムという都に住んでいるのではないようです。以下の聖書の箇所を読んでみましょう。

21:24 **諸国の民**が、都の光によって歩み、地の王たちはその栄光を携えて都に来る。

21:25 都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。

21:26 こうして、人々は**諸国の民**の栄光と誉れとを、そこに携えて来る。

21:27 しかし、すべて汚れた者や、憎むべきことと偽りとを行う者は、決して都に入れない。

小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが、入ることができる。

22:1 御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、

22:2 都の大通りの中央を流れていた。川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は**諸国の民**をいやした。

●ここに出て来る「**諸国の民**」とはいったいだれのことでしょう。人によって解釈が分かれるところですが、ここは、**聖なる都、すなわち、新しいエルサレムに入ることのできた人々**としたいと思います。新しい地においては、その中心は新しいエルサレムです。そこは神と人とが共に住む中心地です。しかし、新しいエルサレムの門は常時開かれており、そこは出入り自由です。いのちの書に名が記されている人々は、自由にそこを出て、他の地で暮らすことは可能です。新しい地においては、人々は神から与えられた「都の光」(神の栄光の光)によって歩み、それぞれに与えられた能力を私たちの想像をはるかに越えた域で活かすことができるはずで、そしてそのような場を地上に求め、新たな文化を築くことができるはずで、ですから、永遠の御国では何もすることがなくて退屈ということはあり得ません。子どもが疲れを知らず、夢中になって遊んでいるように、永遠の御国の人々は、永遠の聖なる創造的な遊びに興じることができるのです。人間に与えられている創造する喜びを感じながら生きるのです。「あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」(詩篇

16:11)が実現する世界です。

●新しい地に住む者たちは、朽ちないからだを与えられているため、常に活動できる状態にあります。御使いと同様に眠る必要がないのです。新しい都の外では、おそらく太陽も月もあると考えられます。なぜなら、「都には夜がない」とあえて書かれているからです。もし、新しい都の外も太陽や月がなければ、そのように書き記される必要はありません。都の中には「夜」がないのです。「夜」がないとは、もはや眠る必要も休む必要もないという意味でもあります。諸国の民は、その「都の光」によって歩むとあります(21:24)。それは、例えて言えば、人は好きなことをしている時には時間を忘れるだけでなく、疲れも覚えません。むしろ快感物質であるドーパミンが常に働いて楽しいのです。ですから、都の外の地に広がった諸国の民はその栄光と誉れとを、中心地である新しいエルサレムに携えて来ることができるのです(黙示録 21:26)。

●十戒を記している出エジプト記 20 章 6 節にはこう記されています。

「わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」と。「千代の恵み」とはどういうことでしょうか。「千代」と「千年」とは違います。「千年」は文字通りの「千年」です。しかし、「千代」とは世代の交代です。マタイの福音書 1 章にはアブラハムからイエシュアまで(省略されているものもありますが)を 42 代(14×3)としています(ちなみに「14」は「ダビデ」の三つの文字(דָּבִיד)を数にして加算した数)。ではアダムからイエシュアまでは何代でしょう。ある計算によれば、76 代だそうです。しかもその間の年月は四千年です。四千年で 76 代です。とすれば、千代というのは途方もない年数になります。

●神の約束は「恵みを千代にまで施す」というものです。もし人が、実際に「千代」を経過する可能性がないとしたら、主はそのような約束はなさらなかったはずで、この主の約束は千年王国ではなく、永遠の御国においてはじめて実現されるのです。聖書が意味する「千代」とは時間的な概念ではなく、時間を超越した永遠の概念と言えます。事実、「千代」と訳されたヘブル語は「千年」を意味する「エレフ」(אֶלֶף)の複数形「アラーフイム」(אֶלְפִים)で、「幾千倍」とも訳せるのです。つまり数を表わす語彙でありながら、数量的な時間という概念を越えた世界を示唆しているのです。

●「エレフ」(אֶלֶף)は「アーレフ」(אָלֶף)と同じ語源をもった語彙です。そもそも、ヘブル語の「アーレフ」(א)という文字それ自体が、すべての本源である「神」を表わしています。つまり「幾千倍」を意味する「アラーフイム」(אֶלְפִים)は、「無限、永遠」と同義なのです。そうした世界で私たちは喜びと楽しみを味わうことができるのです。永遠の御国は決して退屈な世界ではなく、神から来る聖なる快感物質であるドーパミンの溢れている喜びの世界と言えます。その世界こそが、神と人とが共に住む永遠の家なのです。詩篇 90 篇の作者モーセは、「主よ。あなたは代々にわたって、私たちの住まいです。」と告白しています。そしてその住まいに「人の子らよ、帰れ。」と語る主のことばを記しています。この主の呼びかけの愛の深さを、感謝をもって受けとめる者とさせていただきたいと思います。